

笑顔をお届ける会社『わになるカンパニー』で働こう！

— 朝顔・野菜の栽培を通じた取組み —

大阪精神医療センター分教室

1 はじめに

刀根山支援学校大阪精神医療センター分教室には、家庭や学校生活の中での生きにくさや学びにくさを抱えている児童生徒が多く在籍している。また、発達障害の診断または、その傾向があったり、成育歴において愛着形成ができていなかったりする児童生徒も多い。そのため、対人スキルが身につけていないことや自身の感情コントロールが難しく、うまく言語化できないことで、暴言暴力が多い。

そして、本分教室では、令和6年度から『わになるカンパニー』という会社の仕組みを応用した授業を年間通して実施した。自立活動やキャリア教育の視点を取り入れた新たな取組みである。『わになるカンパニー』には、全部で10個の子会社があり、児童生徒の得意なこと・チャレンジしたことを主軸に、組織・チームとしての活動を通して「人のために働く」ことをテーマに様々な事業を展開した。児童生徒の主体性を明確にし、児童生徒のリーダーシップを発揮する機会を確保した。

本稿では、その中の取組みの一つである、朝顔を育てる子会社「わになるあさがお」と野菜を育てる子会社「わになる野菜センター」の活動を紹介する。

2 笑顔をお届ける会社『わになるカンパニー』

(1) 授業のねらい

今回の取組みは、1、2年生合同で行っている生活科の授業で実践した。平均2～3人の児童で週2時間の授業を行った。生活科では、身近な人々、社会及び自然に働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養うことを目標としている。また、当校のキャリア教育では、社会的自立・職業的自立に向けて必要な意欲、態度や能力の育成を目標としている。

そこで、朝顔を通して、5つの取組みを行い、児童の主体性を引き出し、会社の経営をモデルに、人のために活動する・働くことを体験させ、人の役に立つことから自己肯定感・自己有用感を高めたいと考えた。自分の今の良さ、他者の良さ、様々な感情に気づかせて、役割を自覚し、行動に移す力を育てることをめざした。

(2) 「わになるあさがお」の取組み

①朝顔を育てよう！

5月中旬頃から、分教室のグラウンドフェンス沿いに、地植えで朝顔の植えを開始した。植える種は、昨年度、分教室で育てた朝顔の種を使用した。集中して活動に取り組める時間が長くないため、1回の授業で、すべての種を植えることが難しかった。そのため、数回にわたって植えを行った。朝顔の子葉は、植えてから数日で芽が出るため、種の殻が割れ、芽が出てくる様子を、植えの際に観察することができた。自分たちで植えた、種が芽を出し、日に日に育っていく様子を見ることで、もっと植えたい、大きく育ててほしいといった、児童の意欲が引き出された。また、少しずつ大きくなっていく朝顔に対して、愛着をもつ様子も見られ、朝顔の看板を作ったり、フェンスを作ったりすることができた。

②他の病院で入院している児童との交流をしよう！

I 実践報告

「わになるあさがお」の活動を通して、他の病院に入院している、他部署の分教室在籍の児童との交流を開始した。心臓に疾患があり、長期の入院が必要なため、植物を育てることが難しい。そのため、他部署の分教室の友達朝顔の種を代わりに植える仕事を行った。植えた朝顔には、他部署の分教室の児童が作った看板をつけた。そのため、本分教室の児童も「〇〇ちゃんのあさがお」「〇〇くんのあさがお」と言いながら、相手を思いやり、大切に育てようとする姿が見られた。また、他部署の分教室の教員が、本分教室に来校し、オンラインで他部署の分教室の児童とつなぎ、観察を行った。

7月初旬頃から、朝顔の花が咲き始めた。分教室のフェンス一面に朝顔が花を咲かせ、教員や他の学年の友達と、朝顔を通したやりとりが見られるようになった。朝顔の水やりは、対象学年の児童だけでなく、様々な学年、学部の子供生徒が行っていたので、「花が咲いていた」等といったやりとりが学校生活の中で見られるようになってきた。

③押し花を作ろう！

9月になり、まだまだたくさんの花が咲いていたので、押し花作りを行った。朝顔は、やぶれやすいため、作業は丁寧に行う必要があった。はじめは、上手くいかず、イライラとすることもあったが、繰り返し行っていく中で工夫をして取り組む様子が見られるようになった。完成した押し花は、学習発表会で展示し、多くの人に見てもらうことができた。



④種を配ろう！

9月中旬、朝顔の花が種をつけはじめたので、種取りを開始した。たくさんの種が実をつけた。しかし、たくさんの種ができたので、種取りの作業が大変であった。そのため、収穫した種の数を毎回数え、授業のはじめに、前回の数を確認し、本時の目標を決め、活動に取り組んだ。目標を決めて取り組むことで、前回よりもたくさんの種を取ろうと、意欲的に取り組むことができた。

9月下旬、たくさんの種が取れたので、学習発表会で参観者の方にプレゼントするために、種を入れるポチ袋作りを行った。ポチ袋は、自分たちでイラストやデザインを考えながら作った。しかし、ポチ袋作りは、単調な作業の繰り返しのため、はじめは意欲的に取り組んでいたが、次第に飽きてしまう様子が見られた。そのため、どうすれば作業目標を達成できるのか、児童と一緒に話し合いを行い、作業を分担しながら、ポチ袋作りを行った。また、自分たちに任された仕事として行っていることを意識するために、毎回作業後に報告を行った。そういった取組みの中で、少ない人数でも、毎回50枚以上の袋を作ることができた。



10月中旬、ポチ袋にメッセージを書き、種を入れる作業を行った。メッセージは、一つひとつ丁寧に書いていった。

なかなか言葉が思いつかない際、友達が書いている言葉を真似たり、参考にしたりしながら書く姿も見られた。種入れの作業では、ポチ袋作りの経験を活かし、児童が自らが、役割を分けたり、相談したりしながら作業をする様子が見られた。学習発表会当日、多くの参観者の方に種をプレゼントした。もらった人たちからは「ありがとう」「頑張ったね」等、感謝や温かい言葉を直接聞くことができた。

I 実践報告

⑤しおりを作ろう！

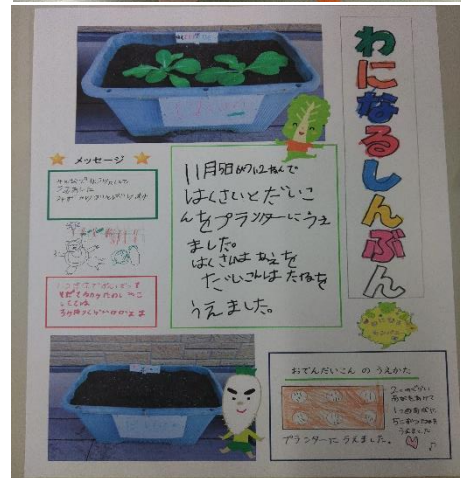
11月、他部署の分教室の友達の朝顔の花が咲いたので、児童一人ひとりが渡す相手を決め、しおりを作り、種と一緒にプレゼントすることにした。学習発表会で、プレゼントした際に喜んでもらった経験から、プレゼントする友達を意識して、しおり作りを行う様子が見られた。実際に会ったことはない友達であるが、リボンや台紙の色を選ぶ際に、友達に喜んでもらえるよう、考えながら作ることができた。プレゼントをした後、しおりをプレゼントした友達からお礼のお手紙をもらった。照れくさそうにしながらも、もらった手紙を何度も読み返し、うれしそうな様子が見られた。



(3)「わになる野菜センター」の取組み

①「わになるしんぶん」を作ろう！

11月、他部署の分教室に長期入院し、治療の関係で屋外での活動ができない2年生の児童からの依頼を受けて、分教室で大根や白菜を育てることになった。苗植えを終えた後、その様子を新聞にまとめて、他部署の分教室の児童に伝えた。新聞の名前は、相談を行い、「わになる(わになるための)しんぶん」にすることになった。メッセージやイラスト、種の植え方等、それぞれの児童が伝えたいことを書いた。文字を書く際には、伝える相手を意識し、普段よりも丁寧に文字を書く様子が見られた。



②もっと交流がしたい！

「わになるしんぶん」を発行した後、他部署の分教室の友達から手紙が届いた。手紙を読んだ児童は、とてもうれしそうに何度も手紙を読み返していた。また、お返事をもらったことで、会ったこともない友達ではあるけれど、他部署の分教室の児童を名前と呼ぶことが増え、関心をもつようになった。普段の学校生活の中でも、話題に出るようになってきた。

12月、子どもたちが、他部署の分教室の友達と一緒に、わになる野菜センターの仕事がしたいと提案があったので、手紙を書いた。文章は、伝える内容をみんなで話し合いながら考え、手紙を書いた。返事が届くまでの間、自分たちの誘いを受けてもらえるか、楽しみと緊張が混じった気持ちで、毎日、返事が届いているか教員に確認を行っていた。快諾の返事をもらってからは、より仲間意識が高まってきている感じが感じられた。

また、「わになる野菜センター」の取組みを通じた交流をきっかけとして、それ以外の授業場面でも交流をもつことができた。国語の教科書単元『おもちゃの作り方を説明しよう』では、他部署の分教室の友達がおもちゃの作り方を紹介してくれた。本分教室の児童も、そのおもちゃを実際に作って遊び、感想を手紙に書いて伝えた。『詩のおくりもの』では、お互いに考えた詩を発表したり、感想を伝えたりした。何度か交流を繰り返してきた経験から、子どもたち自ら、伝えたいことを手紙に書くことができた。

3 児童の成長と病弱教育におけるキャリア教育の可能性

取組みを通じて、子どもたちの多くの変容を感じることができた。まず一つは、児童が自信と責任感をもって仕事に取り組むことができるようになった。様々な活動を「仕事」

I 実践報告

として行い、行ったことを評価される経験を繰り返す中で、朝顔や野菜の仕事は、自分たちの仕事であるという自覚と誇りをもって取り組むことができるようになってきた。そのため、『わになるカンパニー』の子会社の社長を児童生徒に募った際に、活動を行ったすべての児童が、自ら社長に立候補していた。自身の感情のコントロールが苦手な生徒が多かったが、上手くいかないこと、苦手な活動に対しても、気持ちの切り替えを行いながら、活動に取り組もうとする姿が印象的であった。

次に、自分以外の人のために活動に取り組むことの喜びや楽しさを感じることができるようになった。今回の取組みの中で、人のために活動を行う経験を行い、自分たちが行ったことに対して、感謝や評価をされる経験を多く積むことができた。また、他の分教室の児童との交流の中で、自分たちの行動に対して、反応があることで、やりとりを望み、楽しみにする様子が見られた。繰り返しの取組みの中で、自ら「やりたい」「挑戦したい」という気持ちを育むことができた。

病弱教育では、どうしても、個別又は小さな集団で授業を行うことになる。個別に手厚い指導が行える反面、他者とのやりとりが乏しくなり、関わる人数が限られてくる。今回の実践を通して、他部署の分教室の児童とやりとりを行うことで、お互いに良い影響があることがわかった。そのため、やりとりを広げ、もっと気軽に行える環境を設定していきたい。また、「仕事」として様々な活動を行うことで、児童の主体性を育み、自己肯定感や役割意識を高めることができたので、校内だけでなく、病院や地域の「仕事」を担っていくことで、より社会的自立・職業的自立に向けて必要な意欲、態度や能力の育成を行っていける可能性を感じた。